

夏は花火でストレス解消！

司会	池崎 良三	県医師会 理事
ゲスト	天野 安喜子さん (日本花火宗家 鍵屋15代目)	県医師会 副会長

池崎 天野さんは江戸花火の老舗・鍵屋の15代目で、女性は創業以来初めてだそうですね。

天野 ええ。今年で創業346年になります。14代目の父には子どもが女3人で、小学2年生から花火師になりたいと願っていた次女の私が継ぐことになりました。

井上 鍵屋さんと言えば、打ち上げ花火で観客が発する「かぎやあー」という掛け声に象徴されるほどに有名ですが、いつ頃からそうなったのですか？

天野 享保18年(1733年)、全国的な大飢饉と疫病による死者の霊を慰め厄払いを祈願する水神祭として行われた「両国の川開き」で、鍵屋初代弥兵衛が2発の花火を打ち上げたのが、花火大会の始まりとされます。

文化5年(1808年)には、番頭にのれん分けして玉屋の屋号を与えました。川開きの花火は、両国橋を境にして上流を玉屋、下流を鍵屋が担当することになっていったようです。



天野安喜子さん

あまの あきこ プロフィール

鍵屋14代目天野修の次女として江戸川区に生まれる。共立女子高校1年生の時に女子柔道日本代表に選ばれ、福岡国際大会の48キロ級で銅メダルに。日本大学卒業後に2年間、花火製造の修業後、花火プロデューサーとしてデビュー。2000年1月、15代目を襲名、現在に至る。

井上 それで、「かぎやあー」「たまやあー」なのですね。

天野 鍵屋は幕府御用達の花火屋だったようです。きつと掛け声も、大声を出すより黙って花火を見るのが武家のたしなみ、ということだったのではないかと思います。玉屋は將軍の日光御社参の前夜に失火して、所払いとなっていました…。

池崎 県医師会では昨年まで、旧医師会館(県医療センター)で「花火鑑賞会」を行っていました。千葉ポートパークで開催される千葉市民花火大会が居ながらに楽しめる、絶好のロケーションだったのですが、現在は建物が取り壊されてしまい、残念です。

ところで、花火を鑑賞する良い位置というのは、あるのですか？

天野 花火は通常、主催者席を中心に打ち上げ

ます。ですから、主催者席の近くに場所取りをするのが理想的ですが、実際には混雑するのでかなり難しいと思います。

できれば屋外なら、風上で、見上げる角度が45度以内になるような位置を選んでください。その理由は、風下は花火の煙が流れてきて見えにくくなること、見上げる角度が45度以上では首が疲れるからです(笑)。

井上 合理的な理由ですね(笑)。私は写真が趣味で、打ち上げ花火を撮影したことが何度かあるのですが、あらかじめ高さや広がり具合の予想がつかみませんから、全体を入れこむのが難しいと痛感させられました。

天野 そうだと思えます。大きな玉の場合、300メートル以上の上空で、300メートル程度広がりやすから…。写真と言えば近頃、携帯電話や使い切りのカメラを夜空に向けている人をたくさん見かけますが、できるかぎり肉眼で



鑑賞していただきたいですね。

なぜなら、花火の醍醐味は余韻を体感することにあるからです。余韻とは、時間的には間、空間的には「残像」と言えます。次の花火が上がるまでの間、身体全体で余韻を楽しんでいたきたいというのが、花火師としての願いです。

池崎 天野さんは浦安市納涼花火大会(7月30日)、市川市民納涼花火大会(8月6日)などの花火大会をプロデュースされていると伺いましたが、今回の見どころを教えてください。

天野 浦安市納涼花火大会は、日・月・火・水・木・金・土の「7曜」をテーマに、目にする自然「手にふれる自然」を、約7200発の花火と音楽の「コラボレーション」で表現します。また、市川市民納涼花火大会は江戸川区花火大会との共同開催ですが、県内ナンバー1の発数(1万4000発)を誇る大会です。

井上 そんなに多くの花火を打ち上げるのですか。準備も大変ですね。

天野 鍵屋が総合プロデュースする大会では、前年の冬から準備を始めます。テーマを決め、1時間15分ほどの時間制限の中で、いつどんな花火や音楽を使うかをストーリー仕立てにし、それに応じた花火を製造現場に発注します。尺玉と呼ばれる直径30センチ以上の玉は、作るのに半年ほどかかるものもあります。しかも花火

大会は夏だけでなく、秋祭りやカウントダウンなどで開催されることもあるので、製造現場は年中フル稼働です。

花火大会当日は、90人を超えるスタッフのまとめ役になり、点火の指示を出すのですが、打ち上げに失敗すれば花火はたちまち爆弾に変わってしまいますから、一瞬も気が抜けません。そのため、鍵屋では父の考案で、21年前から遠隔操作による電気点火方式を採用しております。

井上 「安全第一」ということですね。私も医師会も「安全で安心な医療を守る」をテーマにさまざまな活動しております。特に「医療の安全」は現在、千葉県医師会が最も力を入れている課題です。…そう言えば、天野さんのお名前にも安全の「安」が入っていますね。生まれながらに花火師になる運命だったのではないのでしょうか(笑)。

天野 そうかも知れません。それに、安喜子の「喜」は観客の皆さんを喜ばせることに通じますから、これはもう花火師以外の何者でもありませんね(笑)。

お医者さんと言えば、花火大会の主催者本部には万が一に備えて、眼科をはじめとする先生方が待機をしてくださっています。大会運営に欠かせない裏方としてご協力いただいているお医者さんに、この場をお借りして感謝申し上げます。

池崎 花火大会は、日本人の暑気払い、消夏法とされてきましたが、現代では「ストレス解消」の場としての効用もありますね。

天野 はい。花火大会に来られた方のアンケート調査結果にも、それが顕著です。「花火を見て得たもの」という問いには、「感動、明日への活力、ストレス解消、爽快感、夏の実感」などがあり、回答者の9割前後の方々が「ストレスが発散できた」と答えています。

現代の日本人は人との交流を苦手とし、集団としての喜怒哀楽の感情を素直に表現する場を失っています。それが、花火という「光と音と迫力の非日常世界」に触発され、人間本来の情緒反応が引き出されて「感動」をするのだと思います。



井上雄元 県医師会副会長

夏は花火でストレス解消！



井上 かつてベストセラーになった糸川英夫さんの名著『逆転の発想』には、一つの思考パターンから抜け出すために必要なのは、感謝・感動・反省」であると書いてありましたが、現代社会の行き詰まりはまさに「感謝・感動・反省」がないところに原因があるような気がしますね。

そして、この3つのキーワードは私ども医師にとっても、常に省みるべき大事な言葉ではないかと痛感します。

池崎 医師も、この夏は積極的に花火大会へ出かけ、大いに感動すべきでしょうね笑。…実は、以前、医薬品メーカーに日本火薬という会社があり、どうしてこんな物騒な社名をつけたのか気になっていたのですが、花火と関係があるのですか？

天野 現在の日本火薬ですね。花火の薬品を取り扱っていた会社です。明治時代以降は花火に化学薬品を使うようになりましたから、その関係で医療用の薬品も作るようになったのだと思います。医療と花火には、意外に共通項が多いものですね。

池崎 医師と花火師のように、職業名に「師」が付くのも一緒ですしね笑。…ところで、日本の花火と外国の花火の違いはどんな点にあるのですか？

天野 例えば、花火玉の形では外国のものは円筒形に対して日本のものは球形です。つまり開いた後の形が違ってきますね。中でも球形で何重の層にもなっていて開く花火は難しく、そのため日本の花火は世界で類を見ないほど精巧で華麗と高く評価されています。

鍵屋は明治に入って、10代目が花火を今日のように丸く開かせ、11代目がそれまで赤橙1色だった「和火」を赤・緑・青の発色に成功し「洋火」へと進化させ、以来、多くの花火師の研究によって次々と新型花火が作られてきました。そうした先人たちの技術革新の精神を引き継いでいくことも、私の使命だと思っております。

井上 男性が築いてきた伝統の上に、女性の新しい感性が加われば、また別の展開ができるかも知れませんね。県医師会も、まもなく女性医師部会を新たに設立します。あらゆる分野で女性の活躍の場が広がるのが、現状打破への近



池崎良三 県医師会理事



道だと思えます。最後に、鍵屋15代目としての今後の抱負をお聞かせください。

天野 15代目を襲名した直後は、大変なストレスを抱えていました。責任者になることは、人間性が大きく問われるからです。私の場合は今も、父がそれとなくカバーしてくれているので何とかやれています。…

また、『代ごとに何かを残す』というのが15代目に与えられた課題なのです。そのために2年前、一念発起して日本大学芸術学部大学院に進学し、今春から博士後期課程で学んでいます。

井上 それは素晴らしい。天野さんにお会いして、花火大会がぐんと身近なものになりました。この夏は、天野さんがプロユースされる花火大会にでかけ、「かぎやあー」の掛け声とともに大いにストレスを発散させたいですね。

天野 ぜひ、そうなさってください。お待ちしております。

池崎 本日は、ありがとうございました。